

何かを得るためには何かを諦めなくてはいけないこともある

——藻谷さんは東日本大震災復興構想会議の専門委員会でもアドバイザーをされていたと思いますが、東日本大震災からの復興について、今の考えをお伺いできますか。

藻谷 ——別の震災からの復興作業を経験されたある方が、今回の震災直後に「復興とは諦めていく過程なのだ」とおっしゃっていたのが印象に残っています。被災者は当初は何も諦められないう。10年かけて無理な部分を諦めていくというのです。何かを得るためには何かを諦めなくてはいけないこともあります。復興というのは結局トレードオフで、そういうふうにしていかないと何も進まないのです。

もちろん、お金があれば土木工学的には全土を防潮堤で守ることもできるでしょう。しかし、土木工学的にできるという話と、有限なお金を使って何をするかという話は別です。日本の地下の構造は大きな板をゆくり折っているようなものですから、いつどこに割れ目が入るかかわりません。今後500年は来ないといつてもさほどの確証はなく、100年後に来るかもしれないのです。しかも、三陸では現実に津波が繰り返されています。何度も波をかぶっている部分に関しては守るのではなく住まないことこそが対策で

藻谷

MOTANI
Kosuke

浩介

さん

に伺いました

多くの地域現場を訪れた自らの体験をもとに語られた、
現役世代の減少がますます進む、今後のまちづくりへの強力なメッセージ

しよう。

明治以降日本の人口が4倍に増える中、危ない場所も家が埋め尽くしてしまいました。陸前高田も、今回壊滅した市街地の大部分は大正時代までは水田でした。人口減少の始まった今こそ住む場所を見直すべきなのです。

土木は再編集の世界に入らないといけない

——被災した地域は人口減少率の高い地域でもあります。まちづくりでは、こうした社会で読み取る視点も重要ではないですか。

藻谷 ——過疎のすすむ被災地だけでなく全国で、戦後50年で2倍に増えた現役世代の人口

が、今後50年で半分に戻ります。ましてや被災地では現役世代が減り始めて30〜40年も経っています。空き家だらけだった旧市街地を、同じ面積で再建する必要はありません。

土木技術を駆使して安全な生活空間と諸インフラを構築することは、国富を次世代のためにストックする最良の手段です。ですが逆に、人口に比べ過剰な整備を行えば、維持更新負担が増えかえってマイナスになります。

現役世代の数が2倍に増えた戦後半世紀には、最低の基準を満たすインフラを応急処置的に大増強することが必要でした。ですがその結果、全国どのまちもそっくり同じ街路景観になっちゃいました。地域地域の個性が感じられなくなっているのは、国際観光という点でも大きなマイ



ナスです。しかも現役世代の増加は首都圏ですら10年前で止まったのに、昔の計画通りの郊外区画整理はまだ全国で続いています。こういうところに投資を続けるのは、国富を減らすことになります。

今世紀日本の土木は、開発面積拡大をやめ、既存の開発部分の再編集に本格的に取り組みなければいけないのではないでしょうか。

人口減少の下で真に残る ストックをつくる時代になる

——土木業界はこれからどのような方向を目

指すべきなのでしょう。

藻谷——「景気拡大の手段としての土木」という人口増加時代の定式に別れを告げ、人口減少時代にふさわしい「エントロピー増大の法則と闘う土木」を志向してほしいですね。

日本のまちづくりはこれまで、人口急増を前提に同じ基準での郊外開発を進めることで、国土のエントロピーを増大させてきました。諸機能が密度高く集積する個性的な空間を、徹底的に減らしてきたのです。その結果各人は孤立を深め、集客効率から、インフラ利用や介護支援の効率までもが悪化しています。

被災地の復興でも、防潮堤や避難ビルを一度

冠水した平地に点在させてエントロピーを増大した状況を維持するのではなく、すべての機能をコンパクトに高台に再建することで、エントロピーを縮小させる。人口減少を契機に、密度の高い生活空間と無住地のメリハリの効いた国土構造を目指してほしいですね。

そのために、土木の若い人たちに言いたいのは現場を見ろということ。ごく限定された文字情報で判断するのは間違いのもと。ネット検索の前に先に現場を見る訓練をしましょう。ひたすら駆けずり回って身体で感じるという経験をしないと、惰性に満ちた旧常識をただ追認するだけになってしまいます。新たな時代への対応は現場の現実からです。

——**第一歩を踏み出すために、われわれとしては何から始めるべきなのでしょう。**

藻谷——事実認識の刷新です。東京でも2000年ごろから現役世代の数が減っているという事実を早く理解しましょう。景気がどうなろうと、人口が減ればインフラの必要量は減り始めます。土地が余り地価が下がるので、逆にエンジニアリングにはいろいろな面白いことが考えられるようになります。

人口増加の下で緊急避難的なまちづくりを我慢してきた過去のやり方は忘れましょう。土木と建築の壁という私のような部外者には理解不能の仕切りも、意味がなくなりません。これからの時代に生きているインフラ屋は、ラッキーだと言えましょう。ようやく真に残るストックをつくる時代になるのですから。